

耳鼻咽喉科における統合医療の実践 —アントロポゾフィー医学のアプローチ—

堀耳鼻咽喉科医院、アントロポゾフィー医学のための医師会運営委員

堀 雅明



A. 統合医療をめぐる背景と現状

統合医療

もともと、医療とは人間丸ごとを扱う分野です。ここでことさらに統合という修飾語をつけるのには、近代医療に対するある種の反動、反省の意味合いがこめられています。今日、先進国を中心として統合医療は新たな潮流としてエコロジーブームとともに大きな注目を集めています。

民主党政権の統合医療推進政策

鳩山元首相のツルの一声で、厚労省は瞑想や催眠療法といった民間医療に加え、チベット医学、ホメオパシーなど世界各国の伝統医学の保険適用や資格制度化を真剣に考え始めました。そして、長妻厚労相は、平成22年1月28日の参院予算委員会で、統合医療にかかわる省内の部署が複数に分かれているとして、統合医療でプロジェクトチーム設置の意向を表明し、統合医療研究に10億円予算を組みました。統合医療は、我が国においてもようやく時代の新たな潮流となりはじめました。

B. アントロポゾフィー医学とは

アントロポゾフィー医学とは、オーストリア生まれの思想家のルドルフ・シュタイナー（1861-1925）が当時の医師らと共に創始した医学分野です。アントロポゾフィーの語源は、“Anthropos 人間 Sophia 哲学”です。我が国では、人間の叡智という意味から“人智学”と訳されています。その基本原理は、“人間観と自然観の拡張”にあります。従来の医学は、歴史的に自然科学の限定された人間観や自然観に縛られてきました。しかし、新たな医学の創生には、より開かれた視野の導入が必要となります。こうした経緯の中

で、この分野の特徴は、以下に解説するように、1. 医師自身の認識力の変容、2. プロセスの認識、3. 医療の個別化という3点が挙げられます。

1. 医師自身の認識力の変容

医学の進歩の第一段階として技術革新による進歩が、ある飽和点に向かって今日、これからの最重要課題は、人間としての医師自身の自己変革により、新たな認識力を備えた医師像を構築することにあります。わが国でもすでに6回行われてきた1週間のIPMT [International Post Medical Training] という海外講師を迎えてこの分野の集中研修でも、自然観察をはじめとして、自然界への観察力を研ぎ澄まし、そのことを通して医師としての診断や治療能力を高めるプログラムが準備されています。歴史的に見ても、世界各国の伝統治療家（シャーマンなど）も、ヒポクラテス以前の古代医療においても、医師は、植物や鉱物などの自然界を理解し、その上で、治療薬の発見と治療を展開してきました。近代科学の視点をしっかりと踏まえつつ、こうした古代の英知に立ち返ることにより、初めて真に近代的な医療が生まれると考えています。

2. プロセスの認識

従来の科学としての医学は、健康や病気を、その多様な“結果”において評価し取り組んできました。ここでは主に“量的な評価と支援”が重要でした。これからは、さらに、健康や病気に関わる様々なプロセスの“質的な評価と支援”も重要となります。そして、ここでは“意味の理解”も大切にされる必要があります。めざましい医療の進歩の中で、古代には一体であった癒しに関わる様々なプロセスが分断され、細分化され、標準化されてきました。たとえば、治療薬の発見と臨床での処方を例に挙げます。アントロポゾフィー

薬学では、薬能を持つ植物、植物からの医薬品製造、治療薬の選択、処方までの過程をひとつの過程として明らかにしています。例として、植物医薬品を挙げます。まずは、特定の植物が、どうして特定の薬効を持つのかに関し多様な知見を持っています。具体的には、植物の生育環境や外見的、生理的特長、薬学的知見などがあります。他方では、人間の体内において進行する多様なプロセスに関する多面的洞察があります。さらに、人間と植物の相互関連に関する多様な洞察。この相互関連の中で、治療薬の発見から創薬、処方までのプロセスが明らかにされます。また、“病気とは何か、健康とは何か”という本質的な問いかけがあります。これに対して、アントロポゾフィー医学においては、人体を構成する3分節と4つの構成要素の多面的プロセスの相互作用の中に生理と病理を一体のものとして理解するモデルがあります。この点において、東洋医学のもつ、“気、血、水”を中心とした多面的モデルと大きな共通点を持っています。ただ、後に概説する人体の3分節構造のように西洋医学のもつモデルとの共通の言語で語れる部分が多いのは、この分野が“西洋医学の補完”ではなく、“西洋医学の拡張”といわれる由縁です。

3. 治療の個別化

近代医学の進歩は、まさに標準化・普遍化という科学の基本原則を応用することにより大きな進歩を遂げることができました。今後は、このしっかりとした基盤を踏まえ、よりきめ細かな医療の展開が求められます。東洋医学においても“同病異治、異病同治”という基本原則があります。言い換えれば、医療

の個別化です。アントロポゾフィー医学においても、この視点はまったく同様で、生きた人間が持つ、多様で固有な背景を十分に考慮して診断や治療を進めていくという姿勢が重視されます。

EU各国を中心に世界に展開しているアントロポゾフィー医学

図1にEU各国、スイス、ドイツ、イギリス、スウェーデン、ポーランド、などの医院と病院を示します。

アントロポゾフィー医学は、世界80カ国で実践されています。今日、ドイツ、スイス、イギリス、スウェーデン、ポーランドなどEU各国には28の病院や140以上の医院が存在し、統合医療の実践的アプローチとして実績をあげています。

アントロポゾフィー医学のEBMとしてのHTAレポート

代替医療評価プログラム(PEK)の一環として、スイス公衆衛生局が、アントロポゾフィー医学の有効性・有用性、妥当性(利便性と安全性)、費用対効果について系統的論評を実施しました。その結果、次のような結論を下しています。副作用の発現率は、0.005%程度であり、アントロポゾフィー医学的治療は正統的医療に比較して安全性が高いこと。患者にとって十分満足のいく治療効果をもたらし、かつ安全でおそらくは費用対効果も高い治療体系であること。この結論は、良質な研究のみに限ったとしても支持されるものであること。また、この分野では、従来の二重盲検法の方法論的限界をふまえ、AMOS研究という独自の臨床研究手法を開発し、すでに多くの実績を上げています。

EU周辺国におけるアントロポゾフィー医学 を実践している医院(青字)および病院(赤字)

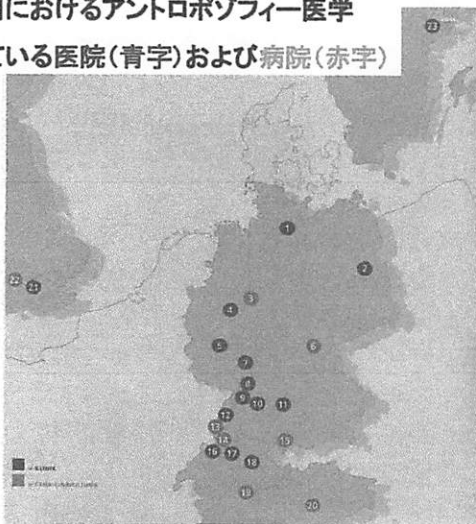


図1 EU各国に点在するアントロポゾフィー医学を実践する医院と病院

C. 耳鼻咽喉科における アントロポゾフィー医学の臨床

以下に、当院で経験したこの分野の治療の有効性、メリットの一部を紹介します。ただし、現時点では、限られた症例数の結果であり、今後の慎重な検討が必要であると考えています。

1. 中耳炎における、抗生物質の減量

急性中耳炎に対し、抗生物質の投与は、慎重な判断をもって限定しています。ただ抗生物質を減量するという選択肢のみでは不十分な場合も多いです。当院では、希望のある場合には、漢方の投与、さらには、アントロポゾフィー医薬品の投与により、鎮痛、消炎、回復促進に効果を上げています。しかし、やはり難治性の再発性中耳炎や滲出性中耳炎などは、抗生剤の大

量投与やチューピングなど従来の治療が必要です。

2. 気管支炎における治癒プロセスの支援

軽症の気管支炎は、十分な観察のもとで、抗生剤を投与せずに自然治癒していきます。この場合も、この分野の治療薬でサポートすることで、比較的、安全に治癒できる例があります。

3. 花粉症に対する注射療法

花粉症の早期からの1週間に1回の皮下注射にて、花粉症に関連する鼻症状や眼症状の軽減される症例があります。多くの場合、抗アレルギー剤や漢方薬を併用することで、ステロイド剤の使用を減らすことが可能です。また、花粉症に伴う副鼻腔炎のコントロールにおいても、従来、特に未治療で悪化した副鼻腔炎の重症例では、抗生剤などを使用しても、なかなか十分な満足度に達しにくい傾向でした。この分野の治療の導入により、抗生剤を使用せずに、症状を軽減できる例があります。

その他に以下のような自験例があります。

4. 乳幼児の鼻炎、鼻閉、アデノイドなどのコントロール
5. インフルエンザの予防、治療および回復支援
6. 虚弱児の成長促進と体力強化

当院に於ける多様な治療スペクトル

- ・アントロポゾフィー医学に基づく診断・治療〔植物、鉱物を原料とした多様なアントロポゾフィー医薬品、ホメオパシー医薬品〕
- ・運動療法：専門の治療家によるオイリュトミーという各人の疾患や体質に合わせた運動の処方
- ・アートセラピー：専門のアートセラピストによる“描くプロセス”を通じての癒しと治療

- ・鍼灸師による操体という心身の自立的な健康強化法
- ・発達障がい児のケアに関するカウンセリングとアドバイス及び芸術療法
- ・精神科臨床〔女性医師によるアントロポゾフィー医学を踏まえた精神科臨床、ただし週1回午後のみ〕
- ・専門の看護師によるアインライビングというアロマオイルによるマッサージ〔導入予定〕

本邦における副作用など

本邦において、海外の研究結果、副作用報告がそのまま当てはまるとは言えず、今後、慎重な検討が必要です。小生も、アレルギー性鼻炎にアトピー性皮膚炎を合併している症例で、この分野の治療薬で皮膚症状を悪化させてしまった例など、すでに、いくつかの副作用を経験しています。地域の先生方にも、このようなことをご迷惑をおかけすることのないよう、皮膚科疾患や他の複雑な症例は、それぞれの分野の専門医と協力するなど、より慎重に進んでいくべきと自戒しています。

D. 人体の3分節構造

この分野の2大概念の一つである“3分節”という興味深い見方を紹介させていただきます。それは、図2に示すように人体を外観と機能の両側面から3つの分節構造に分類する見方です。

まず、神経感覚系について解説します。人間の主に首から上部の頭部における特徴は、可動性の乏しいこと、頭蓋骨の形態に見られるように球形を基本としており、臓器である脳はその内部に格納されています。試しに、皆さんが両手で空中に頭蓋骨をまねて球を作ってみます。その時に作用している力、すなわちこ

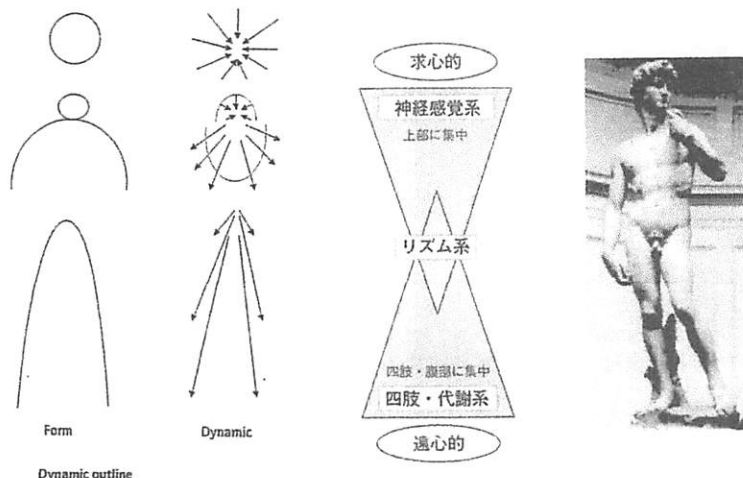


図2 人体の3分節の視点〔求心原理と遠心原理〕

の部位で働いている力（形成力）が求心的（周囲から中心へと向かう）であることに気づかされます。脳の解剖学的特長である表面のしわもこの求心性に一致しています。このように、この分節の大きな特徴のひとつが“求心的である”ことです。これは脳が機能的にも集約的・統合的である事実と一致しています。そして、頭部の発熱は病的な経過であり、正常では、比較的低温に保たれています。感覚情報や食物の摂取なども、入力として考えるとこの求心的傾向に一致しています。もう一つの傾向が、可動性の乏しいことです。頭蓋骨の構成骨は癒合し、脳は衝撃から守られるよう安全に格納されています。すなわち“固定性”です。これを、アントロポゾフィー医学では、プロセス、あるいは傾向として捉えなおし、“硬化の傾向”が頭部に優位に働いていると考えます。そして、アントロポゾフィー医学の疾病観では、中老年期に増加する癌やリウマチ、高血圧をはじめとして多くの成人病は、この頭部に強く働く硬化のプロセスが過剰なために生じる疾患群であると考えられています（図3右）。

一方、神経感覚系とは対極にあたる横隔膜から下方の四肢を含めた分節を四肢・代謝系と呼びます。この分節の特徴は、神経感覚系とは対極である“遠心性”と“運動性”にあります。実は、運動性の代表である四肢の骨格は求心的な頭蓋骨の球状とは対称的にまっすぐな長管骨であり、上肢（図4）では、近位端より、1本（上腕骨）、2本（橈骨・尺骨）、3個、4個（手掌骨）、5本と数学的にも正確にも遠心的です。また、消化管と手足に見られるごとく運動性と熱の発生も特徴的です。いわゆる小児期に多い感染症・炎症性疾患、そして後述するように片頭痛も、この四肢代謝系のプロセスの過剰によって引き起こされる疾患群の一つと理解されています（図3左）。

神経感覚系と四肢・代謝系に挟まれる第3の分節は、リズム系と呼ばれます。この分節の特徴は、“リズムと仲介”です。肺は呼吸において、心臓は拍動においてリズムを刻みます。肉眼的・形態学的にも（図5）、同様な単純な骨格構造が繰り返される肋骨や脊椎骨に見られる特徴もやはりリズム的であると容易に理解できます。アントロポゾフィー医学では、心臓は、下半身の四肢代謝系のプロセスを上半身の神経感覚系に仲介していると考えられています。肺は外界と体内を呼吸において仲介していると考えられています。この分節には、リズムがあることで、初めて流動化し、上部の心身と下部の心身、外界と内界といった対極の間で仲介的な機能を発揮しています。

アントロポゾフィー医学では、この3分節の見方を

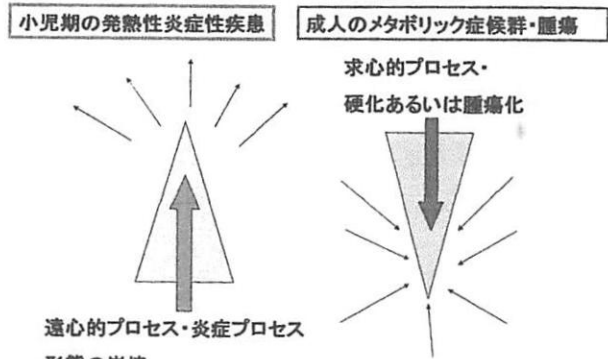


図3 3分節原理に基づく2大疾患群

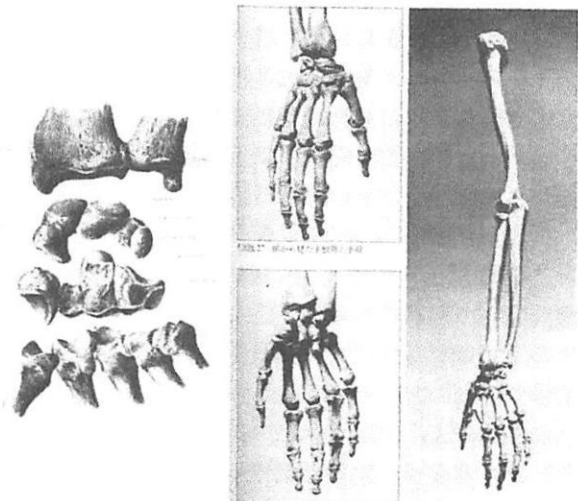


図4 上肢の骨格に見られる典型的な遠心的プロセス

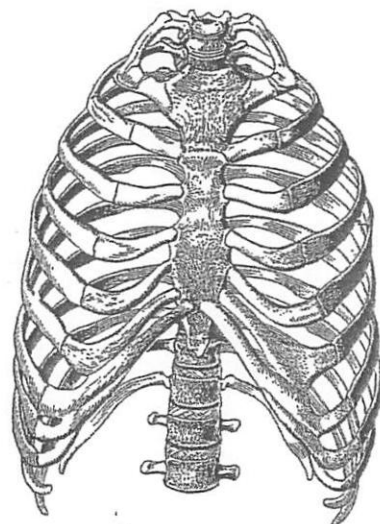


図5 胸部の骨格に特徴的なリズムの原理

通して、人間の健康状態は、神経感覚系と四肢代謝系の両極から働く2つの互いに拮抗する傾向・作用の動

的なバランスの内に維持されていると考えられています。従って、病的な状態においては、いかにして本来のバランスを回復させるかに主眼がおかれます。

E. 統合医療をめぐる現状と課題

最後に、統合医療というと、響きはいいのですが、臨床面では、常に平均的に歩んできました小生にとりまして、この分野に取り組むにつれ、多くの苦悩・チャレンジに直面することにもなりました。研修に関わる膨大な時間と、収入と乖離する費用負担〔大量の輸入医薬品の在庫管理など〕です。輸入した医薬品の投与においては、医師が全責任を負っている〔厚生労働省へ提出する輸入許可書にはこの旨の念書を医師免許のコピーとともに添えさせられます〕という底なしの責任と重圧。また、実際、抗生物質投与があまりに一般化している今日の耳鼻咽喉科医が、抗生物質を減らすとき、小児科医が直面する以上の患者側からの抵抗があります。患者さんの評判〔近隣保育園も同じ〕が落ちます。とにかく、早く見かけ上の症状を消失させることを重視せざるをえない患者さんの切実な家庭事情、保育の現場事情もあります。また、耳鼻咽喉科医の多くは耐性菌の増加に関してあまり深刻な実感を持っていないという実情もあります。一方で、ホメオパシー医薬品〔代替医療で普及している代表的自然薬〕は、安全で、絶対に副作用などはなく、西洋医薬品、抗生物質は危険で、決して吞んではならない毒であると信仰する狂信的自然派患者さんたちの来院。自然療法への過剰な期待を胸に来院し、速効的な効果がえられないとがっかりして去っていく患者さんたち。何事も、前例のない状態で取り組むには相応の苦勞があるものと理解しています。それでも、私なりに医学

を一步進めたいという一心で、必死で歩んでいるというのが実感です。こうした努力が、ホリスティック(全的)な健康/医療モデルを提示し、さらに、新たな社会の創生に少しでも寄与できればと、ささやかに期待するところです。

結 語

今回、耳鼻咽喉科における統合医療の実際—アントロポゾフィー医学のアプローチ—に関し以下の点を中心に報告しました。

- A. 統合医療の発展が今日、新たな潮流となり始めたこと。
- B. アントロポゾフィー医学が、統合医療の中心に位置づけられる分野であること。
- C. 当院の耳鼻咽喉科領域において、ささやかながら、この分野の実績を上げていること。
- D. 人体を3分節に分けて考える見方の紹介。
- E. 統合医療をめぐる実情と課題

文 献

- 1) アントロポゾフィー医学における痛みの本体論とその治療
ペインクリニック Vol.29 NO3 (2008.3) 堀雅明
- 2) Functional Morphology (the Dynamic Wholeness of the Human Organism) Johannes W. Rohen Adonis
Science Books
- 3) Anthroposophic Medicine Effectiveness, Utility, costs, safety Schattauer
- 4) Vademecum of Anthropophic Medicine
- 5) シュタイナー医学入門 マイケル・エバンス 群青社
- 6) 小児科診察室 ミヒャエラ・グレックラー 入間カイ訳
水声社
- 7) 時代病としての癌の克服 リタ・ルロア 堀雅明〔付論〕
水声社